

## 拾遺抄の屏風歌

### 詞書の絵の説明について

拾遺抄には多くの屏風歌が入っているが、詞書に絵の説明があるものもないものがある。本稿は、その理由を明らかにし、ひいては拾遺抄の撰集態度を考えることを目的としている。この問題を検討するにあたっては、貫之の屏風歌が適している。拾遺抄が現行の他撰本貫之集と密接な関係にあることが判明しており、両者の比較が有効だからである。

検討の結果、屏風歌が和歌世界にもたらした新しい題材や設定、屏風歌特有の詠み方の場合に、絵の説明を残すという方針があったことがうかがえ、それは歌の理解を助けるためであったと思われる。ただし、この方針は厳密に実行されたわけではない。また、拾遺抄は、採歌する際にもともと絵の説明があった歌を選ぶ傾向があり、歌の内容を正確に把握した上で採歌しようとしていたと考えられる。拾遺抄撰者は屏風歌を取り入れるにあたって、慎重な姿勢で臨んでいたのである。

キーワード 拾遺抄・屏風歌・詞書・絵・貫之

### はつめ

周知のように、拾遺集及び拾遺集の前身である拾遺抄には、多くの屏風歌が入集している。拾遺抄・拾遺集によって、屏風歌が勅撰

田島 智子

(平成19年10月1日受理 最終原稿平成19年12月7日受理)

集に本格的に取り入れられ始めたと言ってよい。だが、その詞書は、

延喜御時御屏風に水辺梅花の開けたるかた有る所

つらゆき

むめのはなまだちらねども行く水のそこにつつれるかげぞみえける(拾遺抄 春 一八)

この歌の、拾遺集での詞書は「延喜御時御屏風に、水のほとりに梅の花見たる所」(拾遺集 春 一五 貫之)

のように、絵の説明(傍線部)がある場合と、

恒佐右大臣の家の屏風に

つらゆき

のべ見ればわかなくつみけりうべしこそかきねの草も春めきにけれ(拾遺抄 春 七)

この歌の、拾遺集での詞書は「恒佐右大臣の家の屏風に」(拾遺集 春 一九 貫之)

のように、絵の説明がない場合がある。絵の説明がある場合は、拾遺抄では屏風歌七十七首中二十九首、拾遺集では屏風歌百五十九首中四十二首と、約三分の一にすぎない。

前掲の拾遺抄の詞書「延喜御時御屏風に」や「恒佐右大臣の家の屏風に」のような、屏風の成立事情を示す部分については、以前考察し、拾遺抄撰者の意図として「醍醐天皇の御世をたたえ、その威

勢を示す」ことがあると指摘した。<sup>2</sup>

では、絵の説明の部分についてはどうか。なぜ、絵の説明をつけたりつけなかったりするののか。この問題を考えるには、貫之の屏風歌が適している。というのは、拾遺抄・拾遺集の貫之歌と、普通第一系統と呼ばれている現行の他撰本貫之集とが密接な関係にあることが、判明しているからである。田中登氏が全体にわたって指摘され、論者も以前屏風歌について検証した。<sup>4</sup> 両者を比較すれば、貫之集の詞書を、拾遺抄・拾遺集の撰者がどう処理したかがわかるだろう。

現在、拾遺抄は藤原公任によって、拾遺集は花山院によって撰集されたと、推定されている。それぞれの撰者について、処理の仕方を分析すべきであろう。本稿では、まず拾遺抄を取り上げ、中でもとくに貫之屏風歌を取り上げる。先述したとおり、貫之集との比較が有効であり、しかも貫之屏風歌は拾遺抄の屏風歌中もっとも多くを占めているからである。貫之の屏風歌を分析することによって、拾遺抄全体の傾向を推し量ることができよう。本稿である程度の見通しを得て、次の機会に拾遺抄全体、さらには拾遺集全体に考察を進めたいと思う。

なお、障子歌は数が少なく、屏風歌と基本的な差異がないため、本稿では障子歌も含めて屏風歌と称している。また、少数ながら紙絵という存在がある。屏風歌・障子歌と性質が異なるので、別に扱うべきのだが、絵の説明があるかどうかという観点から、数量の中にカウントしていることをお断りしておく。

一、表1 拾遺抄で絵の説明が省略される場合

では、現行の他撰本貫之集と拾遺抄の貫之屏風歌を比較してみよ

<sup>5</sup>。その関係は、順次掲げる四つの表に分類できる。ここに表の内容を簡単に述べると、次のごとくである。

表1 貫之集にあつた絵の説明（傍線部）が、拾遺抄で省略されている場合。 ～ まで十四例。

表2 貫之集にあつた絵の説明（傍線部）が、拾遺抄でも残されている場合。 a～iまで九例。

表3 貫之集でもそも絵の説明がなく、拾遺抄でもない場合。 二例。

表4 貫之集になかつた絵の説明が、拾遺抄ではある場合。 一例。

なお、表及び本文で使用している「72承平七年（九三七年）正月二十二日右大臣恒佐任大臣大饗屏風」のとき屏風番号・屏風名は、拙著『屏風歌の研究 資料篇』での整理に拠っている。また、「」は、当該歌の直前の詞書や作者名がかかることを示している。さて 表1 は、貫之集にあつた絵の説明を拾遺抄が省略している場合である。これを見渡すと、次のような例が目につく。

七月七日	たなはたにぬきてかしつるから衣いと、涙に袖やくちなん
(貫之集 一一一)	
延喜御時月令御屏風歌	
歌略（拾遺抄 秋 九四 貫之）	

七月七日	いとせに一夜と思へとたなはたのあひみん秋の限なきかな
(貫之集 三九五)	

表1 拾遺抄における貴之の屏風歌 その1 絵の説明が省略されている場合

	屏風名	貴之集 (歌仙歌集本)	拾遺抄
72 承平七年(九三七年) 正月二十二日右大臣恒佐 任大臣大饗屏風	72 天慶二年(九三九年) 閏七月右衛門督源清陰屏 風	72 承平七年(九三七年) 正月二十二日右大臣恒佐 任大臣大饗屏風 おなし七年右大臣殿屏風のうた、梅花わかなる所 女すのまへにいて見る	恒佐右大臣の家の屏風に つらゆき
36 延喜十九年(九一九年) 十月十一日右大臣忠平四 十賀屏風	74 天慶二年(九三九年) 閏七月右衛門督源清陰屏 風	36 延喜十九年東宮の御屏風歌うちよりめしし十六首 三月花ちる 野へみれば若なつみけりむへしこそ垣ねの草も春めきにけれ	延喜御時東宮屏風歌 貴之
12 延喜六年(九〇六年) 内裏屏風	12 延喜六年(九〇六年) 内裏屏風	12 延喜六年月なみの屏風八帖かたのうた四十五首 「延喜六年月なみの屏風八帖かたのうた四十五首」 せしにてこれをたてまつる廿首 三月つこもり 花もみなちりぬる宿は行春のふるさとこそ成ぬへらなれ	延喜御時月令御屏風歌 「貴之」
33 延喜十八年(九一八年) 二月醍醐天皇第四皇女勤 子内親王髪上屏風	100 延喜十八年二月女四のみこの御かみあけの屏風の うた、うちのめしにたてまつる」 七月	100 秋のはのそよくをとこそ秋風の人にしらるはしめなりけれ 七月 「延喜十八年二月女四のみこの御かみあけの屏風の うた、うちのめしにたてまつる」	延喜御時御屏風に 貴之
9 さ月山木のしたやみにとます火はしかの立とのしるへなりけり	9 さ月山木のしたやみにとます火はしかの立とのしるへなりけり 五月ともし	9 さ月山木のしたやみにとます火はしかの立とのしるへなりけり 五月ともし 「延喜十八年二月女四のみこの御かみあけの屏風の うた、うちのめしにたてまつる」	延喜御時月令御屏風に 「読人不知」 (拾遺集127では「つらゆき」)
12 たなはたにぬぎてかしつるから衣いと涙に袖やくちなん 七月七日	12 たなはたにぬぎてかしつるから衣いと涙に袖やくちなん 七月七日 「同年閏七月右衛門督殿屏風のれつ十五首」 七月七日	12 たなはたにぬぎてかしつるから衣いと涙に袖やくちなん 七月七日 「同年閏七月右衛門督殿屏風のれつ十五首」 七月七日	延喜御時月令御屏風歌 貴之
112 秋くればはたをるむしの有なへにから錦にもみゆる野へかな のべかな	112 秋くればはたをるむしの有なへにから錦にもみゆる野へかな のべかな 「おなし七年右大臣殿屏風のうた」 む番上りて人おほく野にたりさまくの花さきまじりたり	112 秋くればはたをるむしの有なへにから錦にもみゆる野へかな のべかな 「おなし七年右大臣殿屏風のうた」 む番上りて人おほく野にたりさまくの花さきまじりたり	右衛門督源清陰家屏風歌 「貴之」 つらゆき
95 ひととせにひとよとおもへどたなはたのあひ見ん秋のか ぎりなきかな	95 ひととせにひとよとおもへどたなはたのあひ見ん秋のか ぎりなきかな 七月七日	95 ひととせにひとよとおもへどたなはたのあひ見ん秋のか ぎりなきかな 七月七日	右衛門督源清陰家屏風歌 「貴之」
94 たなはたにぬぎてかしつるから衣いとどなみだに袖やぬ るらむ	94 たなはたにぬぎてかしつるから衣いとどなみだに袖やぬ るらむ 七月七日	94 たなはたにぬぎてかしつるから衣いとどなみだに袖やぬ るらむ 七月七日	延喜御時月令御屏風歌 貴之
88 をぎの葉のそよくおとこそあきかぜの人にしらるはし めなりけれ	88 をぎの葉のそよくおとこそあきかぜの人にしらるはし めなりけれ 七月	88 をぎの葉のそよくおとこそあきかぜの人にしらるはし めなりけれ 七月	延喜御時御屏風に 貴之
76 五月やまこのしたやみにとますひはしかのたちどのしる べなりけり	76 五月やまこのしたやみにとますひはしかのたちどのしる べなりけり 五月ともし	76 五月やまこのしたやみにとますひはしかのたちどのしる べなりけり 五月ともし	延喜御時月令御屏風歌 「読人不知」 (拾遺集127では「つらゆき」)
53 はなもみなちりぬるやどはゆく春のふる里こそそなりぬ べらなれ	53 はなもみなちりぬるやどはゆく春のふる里こそそなりぬ べらなれ 三月つこもり	53 はなもみなちりぬる宿は行春のふるさとこそ成ぬへらなれ 三月つこもり	延喜御時月令御屏風歌 「貴之」
52 風ふけばかたもさだめずちる花をいつかたへ行くはると かは見む	52 風ふけばかたもさだめずちる花をいつかたへ行くはると かは見む 三月花ちる	52 風ふけばかたもさだめずちる花をいつかたへ行くはると かは見む 三月花ちる	延喜御時東宮屏風歌 貴之
7 のべ見ればわかなつみけりうべしこそかきねの草も春め きにけれ	7 のべ見ればわかなつみけりうべしこそかきねの草も春め きにけれ 七月七日	7 のべ見ればわかなつみけりうべしこそかきねの草も春め きにけれ 七月七日	延喜御時東宮屏風歌 貴之

<p>37 延長二年(九二四年) 五月中宮穩子四十賀屏風</p>	<p>「延喜二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」 九月きり山をこめたり ちりぬへき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立かくすらん</p>	<p>127 延喜御時中宮御屏風に 貫之 ちりぬへき山のみみぢを秋ぎりのやすくも見せてたちかくすらん</p>
<p>17 延喜十三年(九二三年) 十月十四日満子四十賀屏風 内裏より</p>	<p>27 足ひきの山かきくらししくるれと紅葉は猶そ照まさりける たてまつる 山のみみぢしくれたる所</p>	<p>136 あしひきの山かきくもりしぐるれどもみぢはいとどてり まさりけり 屏風に 貫之</p>
<p>35 延喜十八年(九一八年) 承香殿女御源和子屏風</p>	<p>118 松をのみときはと思へはよくもになかき水も縁なりけり かはのほとりの松 「延喜八年承香殿御屏風の歌、おほせによりてたてまつる十四首」</p>	<p>433 延喜御時御屏風歌 づらゆき 松をのみときはとおもへばよともにながれて水もみどりなりけり</p>
<p>37 延長二年(九二四年) 五月中宮穩子四十賀屏風</p>	<p>145 四月おほらわのまつりのつかひ いづれをかしるしと思はんみわの山見えとみゆるは杉にざりける 「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」</p>	<p>471 延喜御時中宮御屏風に づらゆき いづれをかしるしとおもはむみわの山ありとし有るはずぎにざりける</p>
<p>73 天慶二年(九三九年) 四月右大将実頼屏風</p>	<p>378 思ふ事ありとはなしに久かたの月よとなればいこそねられね 家にをんな月をみる 「延喜八年承香殿御屏風の歌、おほせによりてたてまつる十四首」</p>	<p>498 おもふこと有りとはなしにひさかたのつきよとなればねられざりけり 小野宮のおほいまうちぎみの家の屏風に 貫之</p>
<p>35 延喜十八年(九一八年) 承香殿女御源和子屏風</p>	<p>120 雨ふると吹松風はきこゆれと池のみきははまならみりけり 人の家の池のほとりの松のしたにぬて風のをとぎける</p>	<p>518 延喜御時屏風に づらゆき 雨ふるとふく松風はきこゆれどいけのみきははまさらざりけり</p>

右衛門督源清陰家屏風歌  
歌略(拾遺抄 秋 九五 貫之)

くても差し支えがなかったと思われる。  
同様の例を探すと、次もそつである。

どちらも、「七月七日」すなわち七夕であるという説明が省略されている。七夕は言うまでもなく、秋の初めの題材としてよく詠まれるものであり、古今集にも七夕歌群が十一首ある。絵の説明がな

おなし七年右大臣殿屏風のつた  
梅花わかなある所女すのまへにいて見ゆる  
野へみれば若なつみけりむへしこそ垣ねの草も春めきにけれ(貫之集 三五四)

恒佐右大臣の家の屏風に  
歌略（拾遺抄 春 七 貫之）

貫之集の詞書に「梅の花と若菜があるところに、女が簾の前に出て、眺めている」とある。すなわち、女が家の端近に出て梅花や若菜摘みを眺めているという光景であり、その女の立場で詠んでいる。拾遺抄が説明を省略した理由を考えてみるに、歌の内容は若菜摘みの季節になったことを喜ぶものである。類似の歌は古今集に、

「題しらず」

「よみ人しらず」

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのへのわかになつみけり  
（古今集 春上 一九）

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかになつみてむ  
（古今集 春上 二〇）

とあり、よく詠まれるものだった。梅が咲いていることや、端近で眺める女の立場で詠んだことが知らされなくても、歌は十分理解できる。拾遺抄は、歌を理解できるならば絵の細かい説明までには必要ないという方針だったのでないだろうか。他にも類似のケースは数多くあるので、以下列挙してゆく。

三月花ちる

風ふけはかたまさためすちる花をいつかたへゆく春とかは

みん（貫之集 一一八）

延喜御時東宮屏風歌

歌略（拾遺抄 春 五二 貫之）

この歌の場合も、「三月に桜が散る」という説明が省略されている。散る桜の歌は、古今集に指摘しきれないほど多くあり、たとえば有名どころでは、

桜の花のちるをよめる

きのとものり

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ（古今集 春下 八四）

という歌がそうである。

三月つこもり

花もみなちりぬる宿は行春のふるさとこそ成ぬへらなれ  
（貫之集 八）

延喜御時月令御屏風歌

歌略（拾遺抄 春 五三 貫之）

「三月の晦日」という、行く春を惜しむ歌も、古今集には何首もあり、たとえば、

やよひのつこもりの日、あめのふりけるにふぢの花ををり

て人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつつぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらしと思へ

ば（古今集 春下 一三三）

という歌がある。

七月

萩あきのはのそよくをとこそ秋風の人にしらるゝはしめなりけ

れ（貫之集 一〇〇）

延喜御時御屏風に  
歌略（拾遺抄 秋 八八 貫之）

この屏風歌の詞書は「七月」だけであり、厳密には絵の説明とは  
言えない。だが、いずれにしろ、

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれ  
ぬる（古今集 秋上 一六九）

「題しらす」

「よみ人しらす」

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹  
く（古今集 秋上 一七二）

のような、秋の到来を風の首で知る歌は古今集に多くある。貫之集  
に詳しい絵の説明があつても省略されたことだろう。

むま車にのりて人おほく野にいたり、さまくの花

さきましりたり

秋くれはゝたをるむしの有なへにから錦にもみゆる野へか  
な（貫之集 二九九）

屏風に

歌略（拾遺抄 秋 一一二 貫之）

この屏風歌には、貫之集で詳しい絵の説明がある。馬や車に乗っ  
て大勢の人々が秋の野に繰り出し、野には様々な花が咲き乱れてい  
るといふものである。画中に描かれた野遊びをする人々の立場で、  
この歌は詠まれている。このような秋の野に遊ぶ場面は古今集にも  
寛平御時、蔵人所のをのこどもさがのに花見むとてまかり

たりける時、かへるとてみな歌よみけるついでによめる  
平さだふん

花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべにねなまし  
ものを（古今集 秋上 二三八）

とある。また、秋の野の虫の歌は、古今集に、

題しらす

よみ人しらす

あき秋も色づきぬればきりぎりすがねぬことやよるはかなし  
き（古今集 秋上 一九八）

という歌の他、数多くある。さらに、この歌は、機織る虫（きりぎり  
す）が秋の野を錦に織つたと見立てているが、類似の歌として後撰  
集に、

「題しらす」

藤原元善朝臣

秋くれは野もせに虫のおりみたるこゑのあやをばたれかきるら  
ん（後撰集 秋上 二六二）

という、秋の野で虫が鳴き乱れている様を綾に見立てた歌がある。  
の屏風歌を拾遺抄に取り入れる時、絵の説明を省略しても、十分  
理解されたであろう。

九月きり山をこめたり

ちりぬへき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立かくすらん  
（貫之集 一五六）

延喜御時中宮御屏風に

歌略（拾遺抄 秋 一二七 貫之）

貫之集によれば「九月、霧が山に立ち込めている」という光景で  
ある。歌の内容は、秋霧が山の紅葉を隠すことを残念がるものであ

る。古今集に、

やまとのくににまかりける時、さほ山にきりのたてりける  
を見てよめる  
きのもものり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ  
(古今集 秋下 二六五)

と同じような歌があり、絵の説明がなくても理解できよう。

山のもみちしくれたる所

足ひきの山かきくらししくるれと紅葉は猶そ照まさりける

(貫之集 二一七)

屏風に

歌略 (拾遺抄 秋 一三六 貫之)

貫之集で、「山の紅葉に時雨が降っている所」とある。紅葉に時雨  
はつきものであり、たとえば古今集に、

「題しらず」

「よみ人しらず」

たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし(古  
今集 秋下 二八四)

とある。これも絵の説明は必要ない。

家にをんな月をみる

思ふ事ありとはなしに久かたの月よとなれはいこそねられ  
ね(貫之集 三七八)

小野宮のおほいまうちぎみの家の屏風に

歌略 (拾遺抄 雑下 四九八 貫之)

「家で女が月を見る」という絵であり、月を眺めながら眠れない  
女の物思いを詠んでいる。やはり古今集に、

「題しらず」

そせいほし

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるか  
な(古今集 恋四 六九一)

「題しらず」

よみ人しらず

月夜よしよしと人につげやらばこてふににたりまたずしもあ  
らず(古今集 恋四 六九二)

という、月を見ながら眠れない女の歌がある。

以上、十四例のうち十例は、類似の歌が古今集にあり、絵の説明  
がなくても歌の内容が十分に理解できるというケースである。

では、残りの四例はどうか。

五月ともし

さ月山木のしたやみにともす火はしかの立とのしるへなり  
けり(貫之集 九)

延喜御時月令御屏風に

歌略 (拾遺抄 夏 七六 「読人不知」)

「ともし(照射)」は、闇夜で松明を燃やして鹿を誘って射ると  
いう鹿猟の方法である。屏風歌で夏の題材となり、暗闇の中で燃え  
るあかりが詠まれた。これまでになかった新しい題材であり、絵の  
説明がないのは不審である。しかし、歌の第三句に「ともす火は」  
とあり、「ともし」が題材であることは紛れようがない。そのため、  
省略してもかまわないと考えたのかも知れない。

次の二例は、どちらも水辺の松である。

かはのほとりの松

松をのみときはと思へばよとよもになかよる水も緑なりけり (貫之集 一一八)

延喜御時御屏風歌

歌略 (拾遺抄 雑上 四三三 貫之)

人の家の池のほとりの松のしたにゐて風のをとぎける

雨ふると吹松風はきこゆれと池のみきはまさらさりけり

(貫之集 一一〇)

延喜御時屏風に

歌略 (拾遺抄 雑下 五一八 貫之)

は常緑の松の影が映った水も緑色であるめでたさを詠んでい

る。は松の下にいる人の立場で、松風が雨音かと聞こえるが、池

の水が増えないことで松風だとわかったという機知を詠んでおり、

ひいては不変であることのためださをほめかしている。どちらも

水辺の松を慶賀的にとらえている。古今集を見ると、

「題しらず」

「よみ人しらず」

我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ (古今集 雑上 九〇五)

「題しらず」

「よみ人しらず」

梓弓いそべのご松たが世にかよろづ世かねてたねをまきけむ

(古今集 雑上 九〇七)

のように、水辺の松を慶賀的に詠む歌はある。だが、や のように水辺であることが十分に活かされた詠み方ではない。かろうじ

て、

秋

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白浪 (古今集 賀 三六〇)

という歌があり、これならば松風が白浪と響き合い、水辺ならではの詠み方となっている。しかし、これは10延喜五年(九〇五年)二月十日右大将定国四十賀屏風歌の一首である。つまり、古今集では、

屏風歌以外には、や のような水辺であることを十分活かした詠み方は、なされていないのである。

後撰集になると、

いづみのくににまかりけるに、うみのつらにて

よみ人しらず

はる深き色にもあるかな住の江のそこも緑に見ゆるはま松 (後撰集 春下 一一一)

撰集 春下 一一一)

という歌がある。しかし、新日本古典文学大系『後撰和歌集』にこの歌の評として「春の深さと色の深さを掛け、水底に映っている景を詠んだのが新趣向」と指摘があるように、実は珍しい詠み方なのである。

屏風歌ならば、

まつすゑうみにいりたる所

うみにのみひたれるまつふかみとりいくしほとかはしるへかりける (伊勢集 七一 16延喜十三年(九一三年)十月十四

日満子四十賀屏風 清貫より) (拾遺抄 雑下 五一六 伊勢)

色のみそまさるへらなる磯の松かけみる水もみとりなりけり

(貫之集 七五 29延喜十七年(九一七年)八月内裏屏風)

のように、水辺の松の光景は定番となっており、水に映る松の緑が

詠まれている。また、

雨とのみ風ふく松は聞ゆれとこ糸には人もぬれすそ有ける（貫之集 二五一 54 延長五年（九二八年）〜同八年（九三〇年）

権中納言藤原兼輔屏風）

という歌は、雨音に似ていても実は松風なので濡れることはない、と詠んでいる。詞書がないので、水辺の松と断定はできないが、松風が雨音に似ていても本当の水ではない、という発想は、と同じである。

水辺の松という光景を、色や水に注目して詠むことは、屏風歌がもたらしたものである。古今集にはなく、後撰集に一首あるだけの珍しい詠み方である。そのような歌の詞書を省略したことは、やはり不審である。理由を考えてみるに、は「流るる水」、は「池のみぎは」と詠み、水辺の松であることが明白なので、「照射」の場合と同じく、説明がなくても理解できると判断したかと思われる。だが、次の例はどうにも説明できない。

四月おほらわのまつりのつかひ

いつれをかしるしと思はんみわの山見えとみゆるは杉にさ  
りける（貫之集 一四五）

延喜御時中宮御屏風に

歌略（拾遺抄 雑上 四七一 貫之）

「おほみわ（大神）の祭」とは、三輪山を神体とする大神社の祭礼のことであり、四月と十二月に行われた。この歌は四月の祭礼の際に宮中から遣わされる使者が、題材となっている。大神の

祭は、和歌に詠まれることは少なく、同時代ではほとんど詠まれていない。屏風歌には、

大神のまつりにまうてたる

いにしへのことならずしてみわの山こゆるしるしはすきにそ有ける（貫之集 一二六 50 寛平九年（八九七年）〜延長八年（九三〇年）延喜御時内裏屏風）

という四月の祭礼の歌があり、

雪中のすきの、おなしおほせ

ゆきのうちにみゆるときは、みわやまのやとのしるしのすきにそありける（躬恒集 一五六 30 延喜十七年（九一七年）承香殿女御源和子屏風）

と、十二月の祭礼を詠んだ歌がある。

屏風歌以外では、三輪山の杉について、

「題しらず」

「よみ人しらず」

わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてる  
かど（古今集 雑下 九八二）

という歌を本歌として、多くの歌に詠まれている。しかし、三輪の杉は恋人を探し当てるしるしの杉であり、恋の歌として詠まれるのが普通であった。屏風歌のように祭に詣でる人の立場で詠んだ歌はない。詞書に絵の説明がないと正しく理解できないかもしれない。それなのに拾遺抄では省略してしまっているのである。

以上 表1 「貫之集にあつた絵の説明（傍線部）が、拾遺抄で省略されている場合」について分析した。その結果、おおよその傾向として、古今集にあるなじみ深い題材、詠み方については、貫之集にあつた絵の説明を省略してしまうことがうかがえた。また、「ともし」、「水辺の松」のように、屏風歌がもたらした新しい題材、新しい詠み方であっても、歌によって題材が明白に示されて

いる場合には、省略することもあったのである。ただし、「大神の祭」のように、省略すべきではないケースもあったことを考えると、この方針が厳密に実行されたわけではないことも知られる。

## 二、表2 拾遺抄で絵の説明が残される場合

では逆に、絵の説明を残すのは、どのような場合であろうか。表2 を検討してみよう。表2 では、次のような例が目にく。

<p>八月こまむかへ あふ坂の関のし水にかけみえていまやひくらんもち月の駒 (貫之集 一四)</p> <p>延喜御時月令の御屏風にこまむかへのかた有る所に 歌略 (拾遺抄 秋 一一四 貫之)</p>
---

東国から貢進された馬を官人が逢坂関に迎えに行く「こまむかへ(駒迎)」は、「駒牽き」とも言い、屏風歌によって和歌世界にもたらされた新しい題材である。後撰集に、

兼輔朝臣左近少将に侍りける時、むさしの御むまむかへに  
まかりたつ日、にはかにさはることありて、かはりにおな  
じつかさの少将にてむかへにまかりて、あふさかより隨身  
をかへしていひおくり侍りける 藤原忠房朝臣

秋ぎりのたちの駒をひく時は心にのりて君ぞこひしき(後撰

集 秋下 三六七)

という例がある。しかし、これ一例であり、「駒迎」は屏風歌の世

界で詠まれていたと言つてよい。同様に、屏風歌がもたらした新しい題材であるがゆえに絵の説明が残されていると思われるものは、次の二例である。

<p>十二月仏名 としのうちにつもれる罪はかきくらしふる白雪ととも消 なん(貫之集 二二)</p> <p>延喜御時の御屏風に仏名したるかた有る所に 歌略 (拾遺抄 冬 一六〇 貫之)</p>
---

「ぶつみょう(仏名)」とは、諸仏の名を唱えて、一年間に犯した罪を懺悔し、罪障の消滅を願う法会である。霜や雪とともに罪が消えてほしいと詠むことが多かった。

<p>りんしのまつり 足引の山あぬにすれる衣をは神につかふるしるしとそみる (貫之集 三六三)</p> <p>恒佐の右大臣の家の屏風に臨時祭のかたあるところに 歌略 (拾遺抄 雑上 四二六 貫之)</p>
--

「りんじのまつり(臨時祭)」は、賀茂の臨時祭のことで、十一月に行われた。山藍で摺り染めにした小忌衣を詠むことが多かった。

以上「駒迎」「仏名」「臨時祭」の三例は、屏風歌によって和歌世界に新しくもたらされた題材であるため、詞書に絵の説明を残す必

拾遺抄の屏風歌

表2 拾遺抄における貴之の屏風歌 その2 絵の説明が残されている場合

	屏風名	拾遺抄
a	35 延喜十八年(九一八年) 承香殿女御源和子屏風	18 延喜御時御屏風に水辺梅花の開けたるかた有る所 つらゆき むめのはなまだちらねども行く水のそこにつつれるかけ ぞみえる 宰相中将敦忠朝臣家の屏風にあれたるやどに人のま できて花見侍るかた侍るところに つらゆき
b	76 天慶二年(九三九年) 宰相中将敦忠屏風	29 延喜御時の御屏風に寺まつでしたる女の有る所 つらゆき あたなれどさくらのみこそふる里のむかしながらのもの に有りけれ 敦忠朝臣の家の屏風の糸に山里に郭公のかたある所に つらゆき
c	76 天慶二年(九三九年) 宰相中将敦忠屏風	68 この里にいかなる人かといへぬして山郭公たえずきくらむ つらゆき 小野宮の大臣の家の屏風に渡りしたる所に郭公なき たるかた有る所に つらゆき
d	79 天慶四年(九四一年) 正月右大将実頼屏風	74 かのかたにはやこぎよせよ郭公道になきつと人にかたむ つらゆき 延喜御時月令の御屏風にこまむかへのかた有る所に 貴之
e	12 延喜六年(九〇六年) 内裏屏風	114 あふさかのせきのし水に影見えていまやひくらむもち月 のこま 延喜御時の御屏風に仏名したるかた有る所に 貴之
f	12 延喜六年(九〇六年) 内裏屏風	160 年の中につもれるつみはかきくらしふるしら雪とともに きえなん 貴之
g	20 延喜十五年(九一五年) 春齋院恭子内親王屏風	379 おもふことありてこそゆけ春霞みちさまたけになにへだ つらん 延喜御時の御屏風に寺まつでしたる女の有る所 つらゆき

i	h
<p>64 承平五年（九三五年） 九月清和七宮貞辰親王母 藤原佳珠子八十賀屏風 重明親王より</p>	<p>72 承平七年（九三七年） 正月二十二日右大臣恒佐 任大臣大饗屏風</p>
<p>324 ざりけり 白雪はふりかくせどもちよまでにたけのみどりはかくれ</p>	<p>363 「おなし七年右大臣殿屏風のうた」 りんしのまつり 足引の山あぬにすれる衣をは神につかふるしとそみる 「承平五年九月東三条のみこの清和の七のみこのみ やす所の八十賀せらるゝ時屏風のうた」 竹に雪のふりかゝれる</p>
<p>440 らざりけり しらゆきはふりかくせどもちよまでに竹のみどりはかは</p>	<p>426 恒佐の右大臣の家の屏風に臨時祭のかたあるところ あしひぎの山あぬにすれる衣をは神につかふるしとそおもふ 清和の女七親王の八十賀、重明親王のし侍りける時 の屏風に、竹に雪のふりかかりたるかたあるところ つらゆき</p>

要があると判断されたものと思われる。

では、次の例はどうか。

d

<p>おとこをんなの木の本にむれ居たる所に舟にのりて わたる 人あるかをよひをさして物いへるやうなりそ のさま郭公をきけるにゝたり かのかたにはやこきよせよ時鳥道になきつと人にかたらん （貫之集 四五二）</p> <p>小野宮の大臣の家の屏風に渡りしたる所に郭公なき たるかた有る所に 歌略（拾遺抄 夏 七四 貫之）</p>
--

郭公は夏の歌の代表的題材である。一見、絵の説明はなくともよいように思える。しかし、舟に乗って水の上を渡りながら郭公を聞くという設定は、実はこれまでにない新しいものである。片桐洋一氏は、これを屏風歌由来と見ておられる。たしかに、同じ設定の歌を探してみると、

天曆御時の屏風によどの渡をすぐる人有る所に郭公をかけ

る

忠見

いつかたになきてゆくらん郭公よどのわたりのまだよぶかきに  
（拾遺抄 夏 七三 88天曆八年（九五四年）村上天皇名所屏  
風）

という、淀の渡りをしながら郭公を聞くことを詠んだ屏風歌や、  
五月、女ともふねにのりていけにあそぶところ

いつしかもはやさしわけてきかせなむわかまつかえのひとえた  
のこ系（元輔集 一二九 130永観二年（九八四年）太政大臣  
頼忠女謁子入内屏風）

という、女達が池で舟遊びをしながら鳥の声を待つことを詠んだ屏  
風歌以外は、拾遺抄以前の時代に見つからない。なお、後者の元輔  
歌では郭公と明言されてはいないが、五月に待たれる鳥と言えば、  
郭公であり、同様の場面だと推定できる。舟で渡りをしながら郭公  
を聞くという設定も、屏風歌がもたらしたものであったのである。拾  
遺抄撰者が絵の説明を残すべきだと判断した理由は、そこにあるだ  
ろつ。

さらに次の例は、屏風歌特有とまでは言えないが、古今集に類似  
の歌がなく、なじみが薄いと思われる詠み方である。

c

山里に時鳥なきたり  
 山里にいかなる人が家あして山ほととぎすたえすきくら  
 ん(貫之集 四三二)  
 敦忠朝臣の家の屏風の系に山里に郭公のかたある所に  
 歌略(拾遺抄 夏 六八 貫之)

山里に郭公が鳴くのを聞く歌である。このような歌は、意外に古今集にはない。古今集以外ならば、

夏ふかき山里なれど郭公声はしげくもきこえざりけり(民部卿家歌合 一)

やまざとにしろのひともがなほととぎすなきぬときかばつげもくるがに(亭子院歌合 四三 興風)<sup>13</sup>

という二首が見出せるので、屏風歌特有とまでは言えない。だが、その数は少ない。一方、屏風歌ならば、

五月たひ人やまのほとりにやとりてほととぎすをきく

山里にたひねよにせし郭公こゑきよそめてなかもしつへし

(貫之集 一四八 37 延長二年(九二四年) 五月中宮穩子四十賀屏風)

十賀屏風)

やまざとにほととぎすなく

山ざともまれらなりけりほととぎすまてともなかぬこゑをき

くかな(中務集 四 144 永祚二年(九九〇年) 頃以前屏風)

という歌など数多く見出せ、定番と言える。山里の郭公は、屏風歌によつて一般化した題材で、古今集にないこともあり、説明をつける必要性を感じたのである。

次の例も、屏風歌に定番の題材であり、かつ古今集に類似の歌が

ないケースである。

g

をんなともやまてらにまうてしたる  
 思ふことありてこそゆけ春霞道さまたけに立わたるかな  
 (貫之集 四五)  
 延喜御時の御屏風に寺まうでしたる女の有る所  
 歌略(拾遺抄 雑上 三七九 貫之)

は、山寺に参詣する女の絵に対して、詠まれた歌である。屏風歌に

三月やまてらにまいる

あし引の山をゆきかひ人しれす思ふことろのこともならなん(37 延長二年(九二四年) 五月中宮穩子四十賀屏風 貫之集 一四三)

系に、をんなのものへまうてつる山路に、いろくの花  
 ちるをとまりて見る

色くの花の心をちらさらは故郷ありとおもはましやは(馬内侍集 二〇一 171 長徳五年(九九九年) 以前絵)

とあり、春の花咲く中、山寺へ行く女という絵が定番になっていたことが知られる。そして、その女たちが救われたいという思いを抱いて歩む様が詠まれている。

古今集で類似の歌を求めると、

山でらにまうでたりけるによめる 「つらゆき」

やどりして春の山辺にねたる夜は夢の内にも花ぞちりける(古今集 春下 一一七)

という歌がある。しかし、山辺の花の美しさを詠むことが主眼であ

り、参詣の思は詠まれていない。思を抱えて山寺へ向かうことを詠んだ歌としては、

おもひに侍りけるとしの秋、山でらへまかりけるみちにて  
よめる くらゆき

あさ露のおくての山田かりそめにつき世中を思ひぬるかな（古  
今集 哀傷 八四二）

という歌があるが、季節が秋である。  
次も同様に、屏風歌に定番の題材であり、かつ古今集に類似の歌がない。

i

竹に雪のふりかゝれる

白雪はふりかくせとも千世までに竹のみとりはかはらざり  
けり（貫之集 三三四）

清和の女七親王の八十賀、重明親王のし侍りける時の  
屏風に、竹に雪のふりかかりたるかたあるところに

歌略（拾遺抄 雑上 四四〇 貫之）

「竹に雪が降りかかっている」絵について、竹の緑が永遠であることを詠んでいる。屏風歌ではこのような竹の緑色に慶賀性を求める詠み方はとても多く、

右近大将定国四十賀の屏風に 素性法師

うゑて見る松と竹とはきみがよにちとせ ゆきかふいろもかは  
らじ（続後撰集 一三五四 10延喜五年（九〇五年）二月十日  
右大将定国四十賀屏風）

人の家に竹のある所

まとちかき ときはのかけはくれたけのよをへてふかきみとり

なりけり（元真集 二五 90天曆十一年（九五七年）四月二十  
二日坊城右大臣藤原師輔五十賀屏風 中宮安子より）  
などと、千年色変わりせず、常盤であることが詠まれた。屏風歌以外にも、そのような詠み方がないわけではない。たとえば、

女ともだちの、つねにいひかはしけるを、ひさしくおとづ  
れざりければ、十月ばかりに、あだ人の思ふといひし事のは  
はといふふることをいひかはしたりければ、竹のはにか  
きつけてつかはしける よみ人しらす

うつろはぬなながれたるかは竹のいつれの世にか秋をしる  
べき（後撰集 雑四 一二七二）

という歌がある。しかし、後撰集歌であり、古今集では、

題しらす よみ人しらす

世にふれば事のはしげきくれ竹のつきふしことに驚ぞなく  
（古今集 雑下 九五八 よみ人しらす）

木にもあらず草にもあらず竹のよのはしにわが身はなりぬべ  
らなり（古今集 雑下 九五九）

と、竹の「節」や節の間の「よ」を掛ける歌ばかりである。

以上 表2 の九例を検討した結果、「駒迎」「仏名」「臨時祭」の三例は屏風歌特有の題材であった。また、「郭公と渡り」は屏風歌特有の設定であった。さらに、「山里の郭公」「花の中を寺詣する女」「竹の緑」の三例は、屏風歌に多く、古今集にはない詠み方であった。つまり、計七例について、絵の説明を残す理由を説明付けることができたわけである。

だが、残りの二例はそうではない。

むめの花さけるところ

梅の花またちらねとも行水のそこにつづれる影そみえける

(貫之集 一一三)

延喜御時御屏風に水辺梅花の開けたるかた有る所

歌略 (拾遺抄 春上 一八 貫之)

「水辺で梅の花が咲いているところ」と同じ光景の歌が、

水のほとりに梅花さけりけるをよめる 伊勢

春ことにながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ(古今集 春上 四三)

今集 春上 四三)

年をへて花のかがみとなる水はちりかかるといふら

む(古今集 春上 四四)

と古今集にある。詠み方についても、水に映る梅の花に注目しており、ほぼ同じである。

a

b

ふるさとの花を見る

あたなれと桜のみこそふる郷のむかしなからの物には有けれ(貫之集 四二五)

宰相中将敦忠朝臣家の屏風にあれたるやどに人のまで

きて花見侍るかた侍るところに

歌略 (拾遺抄 春 二九 貫之)

「ふるさと(捨てられて荒れ果てた家)の花を見る」歌も、

ならのみかどの御つた

ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけ

り(古今集 春下 九〇)

題しらず

よみ人しらず

こまなめていざ見にゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ(古今集 春下 一一一)

と古今集にある。詠み方もほぼ同じで、捨てられ荒れ果てた地にも、昔ながらの美しい桜が咲くことが詠まれている。これらa bには、絵の説明が必要ではなさそうである。

a bのように例外もあるわけだが、表2「拾遺抄で絵の説明が残される場合」を分析した結果、大きな傾向として、屏風歌特有の題材・設定であるか、古今集にはない詠み方の歌である場合に、絵の説明を残していると言える。

三、表3 表4 貫之集に絵の説明がない場合

表3 は、そもそも貫之集に絵の説明がなく、拾遺抄でもない場合である。

(詞書なし)

梅かえにふりかゝりてそ白雪の花のたよりにおらるへらなる(貫之集 六七)

延喜御時依言旨進歌中に

歌略 (拾遺抄 春 一〇 貫之)

内容から察するに、梅の木に雪が降りかかっている様子の絵であつただろう。そのような光景を詠んだ歌は、古今集に、

雪の木にふりかかれるをよめる

素性法師

春たては花とや見らむ白雪のかかれる枝につぐひすぞなく(古

表3 拾遺抄における貫之の屏風歌 その3 絵の説明が貫之集にない場合

屏風名	貫之集 (歌仙歌集本)	拾遺抄
29 延喜十七年(九一七年)八月内裏屏風	「延喜十七年八月宣旨によりて」	延喜御時依宣旨進歌中に 貫之
18 延喜十四年(九一四年)十一月十九日醍醐天皇第一皇女勸子内親王着裳屏風	「延喜十四年十二月女四宮御屏風のれうのつた、ていしんのおほせによりてたてまつる十五首」	10 むめがえにふりかかりてぞしら雪もはなのたよりにをらるべらなる 屏風に つらゆき
40 つねよりも照りまさるかな秋山の紅葉をわけて出る月影		503 つねよりもてりまさるかな山のはのみちをわけていつる月影

表4 拾遺抄における貫之の屏風歌 その4 貫之集になかった絵の説明が拾遺抄ではある場合

屏風名	貫之集 (歌仙歌集本)	拾遺抄
47 延長七年(九二九年)十月十四日元良親王四十賀屏風	「延喜十年十月十四日、女八宮やうせい院の「のみこの四十賀つかつまつる時の屏風でうせさせたまふおほせに」かつまつる」	119 陽成院御屏風にこたかがりしたる所に つらゆき かりにのみ人の見ゆればをみなへし花のたもとぞ露けかりける

今集 春上 六)

題しらず

心ざしふかくそめてし折りければきえあへぬ雪の花と見ゆらむ

(古今集 春上 七)

とあり、なじみ深いものだった。

よみ人しらず

絵から察するに、紅葉する山の端から月が出る光景である。山に出た月が紅葉を照らすことを詠んだ歌は、古今集に、

題しらず

佐保山のははそのもみぢちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

(古今集 秋下 一一八)

「題しらず」

「よみ人しらず」

秋の月山辺さやかにてらせるはおつるもみぢのかずを見よとか

(古今集 秋下 一一八九)

(詞書なし)  
つねよりも照りまさるかな秋山の紅葉をわけて出る月影  
(貫之集 四〇)

屏風に

歌略 (拾遺抄 雑下 五〇三 貫之)

とある。このように、表3 の場合は、もともと貫之集に絵の説明がなかったために、拾遺抄でも絵の説明がつけられなかったのであるが、たとえ貫之集で絵の説明があっても、拾遺抄で省略したとだろつ。

最後の表4 は、貫之集には絵の説明がなかったのに、拾遺抄

にはあるという場合である。

(詞書なし)

かりにのみ人のみゆれば女郎花はなの袂そ露けかりける  
(貫之集 一七五)

陽成院御屏風にこたかがりしたる所に

歌略 (拾遺抄 秋 一一九 貫之)

「こたかがり(小鷹狩)」とは、小鷹を使って小鳥を捕る狩で、秋に行われる。拾遺抄に絵の説明があるが、現存する貫之集諸本には詞書がない。拾遺抄撰者が使用した貫之集には「こたかがり」という詞書がついていたのだろうか。しかし、この歌は47延長七年(九二九年)十月十四日元良親王四十賀屏風(貫之集 二六八、二七八)全十一首中の一首であり、他の十首全てにも詞書はない。拾遺抄撰者が使用した貫之集に、詞書があった可能性は低いのではないか。

「小鷹狩」という題材について考えてみよう。屏風歌によって和歌世界にもたらされたものであり、古今集や後撰集には「小鷹狩」は登場しない。これまでの傾向から言うと、絵の説明があつてしかなるべきなのである。また、その詠み方は、

こたかゝり

秋の野にかりそくれぬる女郎花こよひはかりの宿はかさなん  
(貫之集 一五 12延喜六年(九〇六年)内裏屏風)  
秋の田のほにし出ぬれはうちむれて里とをみよりかりそきにけ  
る(貫之集 一六 同屏風)

のように、女郎花が秋の田にことよせて詠まれることが多かった。

すなわち、女性を暗示する女郎花に、狩り暮れた後の仮初の宿を乞うことや、秋の田の穂を刈るではないが狩に来たことを、掛詞を用いながら詠んだのである。<sup>15</sup> 拾遺抄に採歌された歌も、女郎花をモチーフにした典型的な「小鷹狩」の詠み方である。しかし、「小鷹狩」であることを明白に示す詠み方ではない。絵の説明があつた方が、歌の理解を助けるだろう。つまり、絵の説明は、必要と判断した撰者が付けたのではないか。

以上、拾遺抄の貫之屏風歌を 表1 から 表4 に分けて分析してきた。その結果として、次のことが言える。屏風歌がもたらした新しい題材、新しい設定、及び古今集にない詠み方の場合は、絵の説明を残し、古今集にあるなじみ深い題材、詠み方の場合は、絵の説明を省略するという方針があつた。ただし、それはおおよその傾向であつて、方針に反する例もある。この方針が厳密に実行されたわけではないのである。

#### 四、貫之集から採歌する際の偏り

さて、ここまで四つの 表 に分けて、拾遺抄の方針を考えてきたが、全体を見渡すと、さらにある傾向に気づく。それは、拾遺抄が貫之集から採歌した歌のうち、もともと貫之集に絵の説明がなかった場合が、きわめて少ないということである。表3 表4 を併せてわずか三首だけである。

そこで、貫之集からの採歌状況を整理して一覽にしてみよう。本稿末尾の 表5 は貫之集での詞書に絵の説明がある場合、表6 は貫之集での詞書に絵の説明がない場合である。屏風ごとに整理している。表5 は総歌数三百六十一首、表6 は総歌数百八十首であり、貫之集では絵の説明がある方が多い。しかし、拾遺抄が採

歌した歌を見てみると、表5 は全部で二十三首、表6 は全部で三首である。総歌数が 表5 の方が二倍であることを考慮しても、表5 への集中の度合いが強い。

このような偏りが生じたのはなぜか。それは、拾遺抄撰者が貫之集の詞書を必要としたからではないだろうか。屏風歌は類型的な表現が多いので、詞書がなくてもどのような絵に対して詠んだものか、ある程度推定がつく。貫之の屏風歌は中でも類型性が強い<sup>16</sup>。それでも、採歌資料である貫之集に絵を説明した詞書があれば、何を詠んだものか確信が持てる。詞書の絵の説明に照らし合わせて、歌の内容を正確に認識した上で採歌しようとしていると言えるだろう。

### おわりに

まだ、拾遺抄の貫之屏風歌のみを検討しただけの段階であるが、貫之集との比較から興味深い結果を得た。

まず、拾遺抄が絵の説明を残すのは、屏風歌が和歌世界にもたらした新しい題材や設定、屏風歌特有の詠み方の場合である。逆に説明を省略するのは、古今集に類似の歌があり、なじみ深いものの場合である。つまり、歌を理解するのに必要な説明を残すという方針だったと思われる。ただし、この方針は厳密に実行されたわけではない。

また、現行の他撰本貫之集との密接な関係が判明しているおかげで明らかになったことだが、拾遺抄は、採歌する際にもともと絵の説明があった歌から選ぶ傾向がある。採歌する際に、歌の内容を正確に把握することを心がけたということである。

拾遺抄は、勅撰集としてはじめて屏風歌を大量に取り入れた。しかも、四季部という根幹部分にそのほとんどを配列した。おかげで

屏風歌の新しい世界が、四季の題材として定着していったのである。しかし、その際の撰者の姿勢は、慎重であった。それは、元の資料の詞書によって歌の内容を正確に把握しようとしていること、理解を助けるために必要な絵の説明を残していることからうかがえる。

付け加えて言うならば、絵の説明を残すかどうかの基準が、古今集に類似の歌があるかどうかであることから、拾遺抄撰者には、後撰集よりも古今集を尊重する態度があったこともうかがえる。拾遺抄の立場を示すものとして指摘しておきたい。

拾遺抄の屏風歌

表5 貫之集での詞書に絵の説明がある場合

貫之集	歌数	屏風名	拾遺抄番号
貫之集 3 } 22、	21首	延喜六年(九〇六年)内裏屏風	53・76・94・114・160
貫之集 23 } 28	6首	延喜十三年(九一三年)十月十四日満子四十賀屏風 内裏より	136
貫之集 44 } 50	7首	延喜十五年(九一五年)春齋院恭子内親王屏風	379
貫之集 60 } 65	6首	延喜十六年(九一六年)齋院宣子内親王屏風	
貫之集 90 } 96	7首	延喜十七年(九一七年)中務宮敦慶親王屏風	
貫之集 97 } 104	8首	延喜十八年(九一八年)二月醍醐天皇第四皇女勤子内親王髪上屏風	88
貫之集 105 } 112	8首	延喜十八年(九一八年)四月東宮保明親王屏風	
貫之集 113 } 126	14首	延喜十八年(九一八年)承香殿女御源和子屏風	433・518・18
貫之集 127 } 138	12首	延喜十九年(九一九年)十月十一日右大臣忠平四十賀屏風	52
貫之集 139 } 160	22首	延長二年(九二四年)五月中宮穩子四十賀屏風	127・471
貫之集 161 } 172	12首	延長二年(九二四年)左大臣忠平室源順子四十賀屏風	
貫之集 173 } 187	15首	延長四年(九二六年)八月二十四日清貴民部卿六十賀屏風	
貫之集 188 } 198	11首	延長四年(九二六年)九月二十八日字多法皇六十賀屏風	
貫之集 218 } 243	24首	寛平九年(八九七年)〜延長八年(九三〇年)延喜御時内裏屏風	
貫之集 320 } 324	5首	承平五年(九三五年)九月清和七宮貞辰親王母藤原佳珠子八十賀屏風 重明親王より	440
貫之集 325 } 333	10首	承平五年(九三五年)十一月内裏屏風	
貫之集 334 } 335	2首	承平六年(九三六年)春忠平貴子父子隔ての障子	
貫之集 336 } 339	4首	承平六年(九三六年)左大臣藤原忠平五男師尹元服屏風	
貫之集 341 } 350	11首	承平六年(九三六年)七月以前時平室廉子女王七十賀屏風	
西240、 貫之集 244、 245、 247、 248	17首	承平七年(九三七年)正月二十二日右大臣恒佐任大臣大饗屏風	7・112・426
貫之集 366 } 387	22首	天慶二年(九三九年)四月右大将実頼屏風	498
貫之集 388 } 401、 御404	15首	天慶二年(九三九年)閏七月右衛門督源清陰屏風	95
貫之集 402 } 415	14首	天慶二年(九三九年)内裏屏風	
貫之集 416 } 447、 御441	33首	天慶二年(九三九年)宰相中将敦忠屏風	29・68
貫之集 448 } 458、 御476	12首	天慶四年(九四一年)正月右大将実頼屏風	74
貫之集 459 } 486	28首	天慶四年(九四一年)三月内裏屏風	
貫之集 507 } 511	5首	天慶五年(九四二年)九月内裏屏風	
貫之集 523 } 532	10首	天慶八年(九四五年)二月内裏屏風	
計	361首		23首

\* 西：西本願寺本貫之集 御：御所本貫之集

表6 貫之集での詞書に絵の説明がない場合

貫之集	歌数	屏風名	拾遺抄番号
貫之集 29、43	15首	延喜十四年(九一四年)十一月十九日醍醐天皇第一皇女勸子内親王着裳屏風	503
貫之集 56、59	4首	延喜十五年(九一五年)九月二十二日清和七宮貞辰親王母藤原佳珠子六十賀屏風	
貫之集 51、55	5首	延喜十五年(九一五年)十二月時平室廉子女王五十賀屏風	
貫之集 66、89	24首	延喜十七年(九一七年)八月内裏屏風	10
貫之集 244、247	4首	延長六年(九二八年)中宮總子屏風	
貫之集 279、319	41首	延喜末(九三三年)～延長七年(九二九年)内裏屏風	
貫之集 268、278	11首	延長七年(九二九年)十月十四日元良親王四十賀屏風	119
貫之集 248、267	20首	延長五年(九二八年)～同八年(九三〇年)權中納言藤原兼輔屏風	
貫之集 199、217	19首	延長二年(九二四年)～承平二年(九三二年)三條右大臣定方屏風	
貫之集 351、353、西236	4首	承平七年(九三七年)正月内裏屏風	
貫之集 487、506、御519	21首	天慶五年(九四二年)亭子院屏風	
貫之集 512、522、御540	12首	天慶六年(九四三年)四月尚侍貴子四十賀屏風	3首

田 鳥 智 子

注

- 1 本稿ではとくに断らないかぎり、私家集は私家集大成、それ以外は新編国歌大観を使用する。  
 拙稿「拾遺抄・拾遺集の屏風歌の意義 詞書の表現によって」(『島津忠夫教授退官記念論文集』和泉書院 平成二年)。後に、拙著『屏風歌の研究 論考篇』第一章第五節「拾遺抄・拾遺集の態度」(和泉書院 平成十九年)所収。
- 2 田中登氏「三代集の貫之歌 貫之集試論」、『三代集の研究』(小沢正夫編 明治書院 昭和五十六年)所収。  
 注2に同じ。
- 3 次の二首は、拾遺抄で作者「読人不知」、拾遺集で作者「貫之」とあって作者名がゆれており、しかも現行の他撰本貫之集にない。注2の拙稿で検討した結果、貫之歌ではないという結論を得たので、本稿でも考察対象に入れない。
- 4 桃園にすみ侍りけるこ前斎院の家の屏風に 「読人不知」  
 しろたへのいもがころもとむめの花いろをもかをもわきぞかねつ  
 (拾遺抄 春 一三)(拾遺集一七では作者「つらゆき」)  
 北宮の裳ぎの時の屏風に 「読人不知」  
 はるふかくなりぬとおもふをさくら花ちるこの本はまだ雪ぞふる  
 (拾遺抄 春 四四)(拾遺集六三では作者「つらゆき」)
- 5 拙著『屏風歌の研究 資料篇』(和泉書院 平成十九年)  
 配列全体で、梅の花が咲き若菜摘みをするという春の野の光景が浮かび上がっていることについて、拙稿「拾遺集の配列と屏風歌」配列に広がる屏風絵」(『中古文学』七八号 平成十八年十二月)で指摘した。
- 6 新編国歌大観ではこの拾遺抄七六歌の作者は記されず、前の歌の「読人不知」がかかることになるが、『拾遺抄』(片桐洋一著 大学堂書店 昭和五十二年)によれば、流布本系統の鳥根大学本と異本B系統の静嘉堂文庫所蔵貞和三年奥書本には作者「貫之」とある。
- 7 片桐洋一氏校注『後撰和歌集』(新日本古典文学大系 岩波書店 平成
- 8
- 9

- 二年)
- 10 この伊勢歌は拾遺抄五一六に入集しており、「五条の尚侍の質の屏風の系に、松のうみにひちたるかたあるところに」と絵の説明がある。拾遺抄の中で絵の説明を省略するかどうかゆれていたことがわかり、残すという判断もありえたことを示している。
- 11 片桐洋一氏『拾遺抄』の歌材と表現 大和絵屏風歌との関連において「『古今和歌集以後』 笠間書院 平成十二年）（初出『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』 塙書房 昭和四十七年）
- 12 『元輔集注釈』（後藤祥子氏 貴重本刊行会 平成十二年）も貫之集四六二と同様の、渡りをしながら郭公を聞く状景だとする。
- 13 この亭子院歌合歌は、拾遺集九八に詞書「延喜御時屏風に」、作者「貫之」で載るが、貫之集にはなく、拾遺集の誤りだと思われる。
- 14 片桐氏も前掲論文において、屏風歌における山里と郭公について論じておられる。注11参照。
- 15 また、屏風歌のもたらした山里全般のイメージについては、笹川博司氏の『山里』の自然美の形成 『拾遺集』春夏から『後拾遺集』秋冬へ（『平安文学の想像力』「論集平安文学」第五号 平成十二年）という論があり、『拾遺集』で山里が春の花見、夏の郭公を聞く美的空間になったことには、屏風絵や障子絵の影響があったと指摘されている。鷹狩の屏風歌については、詳しくは拙稿「古今集時代の屏風歌の詠法 鷹狩を中心として」（『国語国文』六十一巻四号 平成四年四月）を参照されたい。
- 16 菊地靖彦氏『古今集』以後における貫之』（桜楓社 昭和五十六年）に詳しい指摘がある。